旧神通川流域の土地利用と水辺景観の変遷

吉川　真裕[1]・馬場先　恵子[2]

[1]学生会員　金沢学院大学大学院（〒920- 1392 石川県金沢市末町 10）
E-mail:bn14ra50@kanazawa-gu.ac.jp

[2]正会員　金沢学院大学（〒920- 1392 石川県金沢市末町 10）
E-mail:babasaki@kanazawa-gu.ac.jp

近世から現代にかけての旧神通川流域の土地利用を調べ、各時代における歴史的価値が現代の整備においてどのように生かされているのかを検証した。急流河川であるため甚大な洪水の被害を受けながらも、江戸時代には、富山城の背面に船橋が架けられ、流通の拠点となるとともに、個性的な水辺景観が形成された。明治後期から昭和初期にかけて神通川改修工事が行われ、富岩運河が開削された。これによって、富山の工業化が進み、これまで培われてきた河川との関係を希薄化させる契機となった。戦後、川の汚濁が進んだが、現在は旧河川沿い及び富岩運河は親水空間として整備されている。

Key Words: *Jinzu-river, Land use, Waterside scenery, Matsukawa, Fugan canal*

1.　はじめに

富山市街地における神通川の現在の流路は、明治後期から昭和初期にかけて行われた河川改修によって誕生した新流路である。旧河道は、現在、松川といたち川の流路として残っている。富山県では、優れた自然の一つである豊かな水辺の環境を活かして魅力ある空間となるよう「水辺のまち夢プラン」を平成 20（2008）年に策定している。松川といたち川も水辺空間の整備対象となっている [1)]。このプランの課題として、富山の歴史や伝統、文化を後世に継承していくために、「水の王国とやま」ならではの整備の必要性が示されている。

本研究の目的は、神通川の旧河道である松川の歴史的意義を明らかにし、富山の水辺空間を生かした街づくりの中でどのように生かされているのかを検証することである。そのために、近世から現代にかけての旧神通川流域の土地利用を調べ、時代ごとの水辺景観の復元を試みる。

2.　神通川の概要

(1) 富山県の地理的特性

神通川は、岐阜県高山市の川上岳（かおれだけ・標高 1,626m）に水源を発し、岐阜県では宮川と呼ばれ、数々の支川と合流しながら高山市などを流れている。富山県に入ると神通川と呼ばれ、富山平野を流れ下り、富山湾に注ぐ、流路全長 120km、流域面積 2,720km^{2}の富山県内最大の一級河川である [2)]。

富山県内には、総数 300 を超える大小さまざまな河川が流れている [3)]。一級河川は神通川の他に、標高 3,000m 級の立山連峰から流れる常願寺川や黒部川、庄川、小矢部川がある。県内では、この五大河川に二級河川の片貝川と早月川を加えて、「七大河川」として知られている。立山連峰から富山湾までの地形によって生み出される急流河川が多い。

(2) 神通川による洪水被害

多くの急流河川をもつ富山県は、常に洪水の危険に晒されてきた [4)]。神通川も何度も氾濫を繰り返し、多くの被害をもたらしてきた。近世までは、治水技術が発達していなかったことから被害を根本的に解決することはできなかった [5)]。

近代になり、富山は石川県とともに行政を進めることになった。しかし、金沢中心の道路整備を重視する加賀・能登側と、治水を急務とする富山側の意見が対立し、明治 16（1883）年 5 月に現在の富山県が誕生した [6)]。表 1 は、富山県成立後 20 年間の県歳出額である [7)]。県の歳出決算額に占める河川費の割合が 20%以上を締め、多い年には 80%を超えることもあり、富山県が治水に力を入れていたこ

とがわかる。後述するバイパス工事である馳越工事や神通川上流部のダム建設を経て、洪水の発生をようやく抑えられるようになった。

表 1　富山県歳出決算額に占める河川費の割合

（単位：千円）

年度	歳出決算額	河川費	歳出の内河川費の割合
明治　16	343	92	27%
17	414	231	56
18	302	73	24
19	467	92	20
20	396	87	22
21	378	88	24
22	401	183	46
23	421	214	51
24	1071	880	82
25	646	356	55
26	515	145	28
27	493	183	37
28	691	399	58
29	1369	1007	74
30	1909	1507	79
31	1299	752	58
32	1272	558	44
33	2052	957	47
34	1188	267	23
35	1310	277	21
36	1795	378	17

（出典：文献 6）

3.　旧神通川流域の変遷

富山市は、昭和 20（1945）年に受けた空襲のため、それ以前の遺構は限られる。そこで、近世から近代にかけての旧神通川流域の変遷を把握するために、絵図・地図、写真や文書資料による分析を行った。しかし、絵画資料は作者の意図によって構図変更を伴う場合があるため、同時期の地図との比較を行った。

(1)　近世の土地利用

富山城は、天文 8（1543）年に神保長職が築いた後、織田信長に派遣された佐々成政が再整備したとされる。その後、加賀藩前田氏の所領となり、寛永 16（1639）年には、10 万石を分与され加賀藩から独立し、前田利次が富山藩の初代藩主となった[8]。

図 1 は、富山藩が加賀藩から独立した初期の富山の城下町を描いたとされている「越中国富山古城之図（正保 4（1647）年・蔵、金沢市立玉川図書館）」を模式的に表したものである。近世の神通川は現在の流路とは大きく異なり、富山城の背面を流れていたため、天然の要害として防衛のために利用されていた。神通川を背に城が置かれ、富山城以南に城下町が広がる。北陸街道は東からいたち川を渡り、城下を抜け神通川を越えて金沢へ通じる。また、舟運の拠点となる荷揚げ場（木町）が、富山城の東側、神通川下流部に置かれた[10]。

神通川を渡るために、舟渡しを利用していたが、1610 年頃に、常設の船橋が架けられた[11]。船橋が架けられた後も、舟渡しは存続し、船橋と舟渡しという 2 つの方法で神通川を渡っていた。神通川船橋の場合、64 艘の舟を繋ぎ、長さは約 300m を誇り、北陸街道の重要なルートとなっていた。この神通川船橋は、浮世絵や書物などに描かれ、現在に当時の姿を伝えている[12]。

江戸末期には、富山城の東側に、神通川船橋を望む千歳御殿が造営された[13]。千歳御殿からの景色が文献としても残っている。図 2 では、千歳御殿は丸で示した位置にあたる。この図では、船橋を渡る人々、漁業に従事する人々、活発に行き交う舟運の様子が見て取れる。船橋の背景に富山の城下町が見え、さらにその後ろに立山連峰が描かれている。図 3 は、江戸時代に歌川広重が描いた浮世絵「六十余州名所図会、越中富山船橋」である。全国的にも広く知られた景観であったと伺われる。対岸に富山城下町が広がっていない様子から、右岸から左岸方向の構図である。しかし、その方向だと神通川の流れが逆になるため、構図変更が行われている点に注意しなければならない。

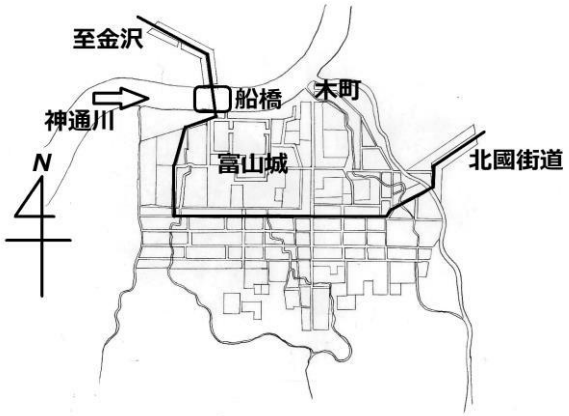

図 1　近世初期の富山城下町（文献 9 より作成）

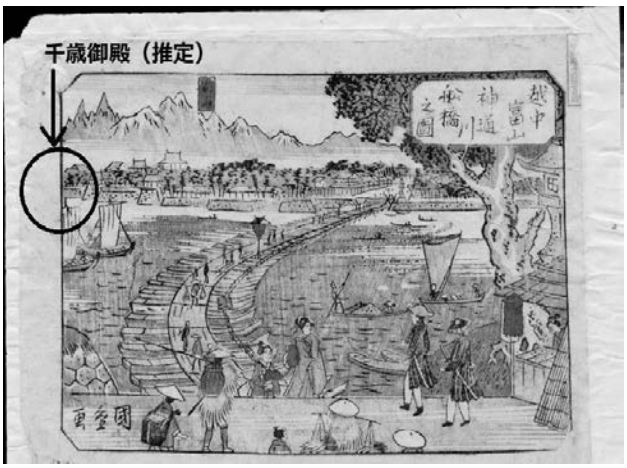

図 2「越中富山神通川船橋之図」（文献 14 より作成）

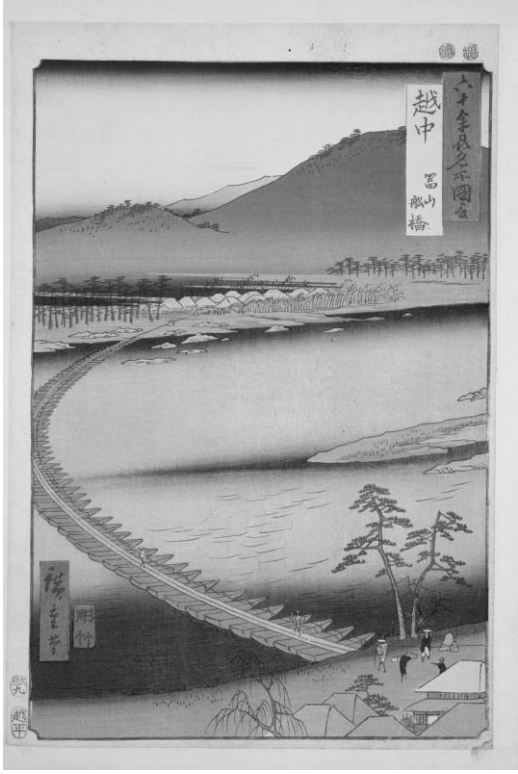

図 3　「六十余州名所図会、越中富山船橋」（文献 15）

(2)　近世の神通川の歴史的価値

（1）から神通川の水辺景観は以下のようであったと考えられる。近景に、神通川に架かる船橋、漁業に従事する人々、活発な舟運が見られ、中景に富山城下町、堤防の桜並木が存在し、遠景に立山連峰、常願寺川、呉羽山が見えた。このように、水辺景観と山岳景観の両方を併せ持っていたといえる [16]。図 4 は、文献資料に描かれた概念図を示す。

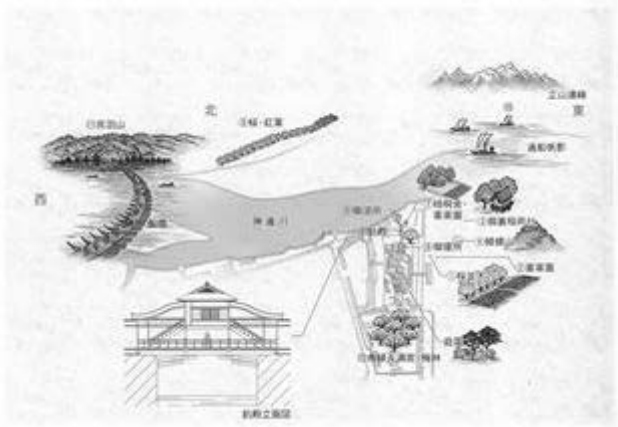

図 4　千歳御殿概念図（文献 17）

近世の神通川は、北陸街道の要衝、漁業の場であるなど人々の生活と密接な関係であった。また、富山城下町の天然の要害としての役割も担っていた。しかし同時に、城下町に甚大な被害をもたらす洪水を引き起こすため、恐怖の対象でもあった。よって、近世における価値は、富山の町に住む人々の意識が常に川に向けられており、神通川に対して畏敬の念を抱いていたことにある。

(3)　神通川改修工事

近代に入り、日本は、欧米の先進的な技術を取り入れた。治水技術の向上により、明治後期から昭和初期にかけて神通川も 3 期にわたって行われた。第一次は明治 30（1897）年に神通川蛇行部の川幅拡大工事が行われた [18]。しかし、川幅の拡大だけでは洪水の被害を抑えられなかった。そのため、明治 34～36（1901～1903）年にかけて第二次神通川改修工事として、蛇行していた神通川に直線路を設ける馳越工事が行われた [19]。川の勢いを利用するこの方法によって、旧河道に徐々に水が流れなくなった。大正 3（1914）年の洪水によって直線路が本流として決定づけられ、旧河道は廃川地になった。図 5 の「大日本職業別明細図之内」は、富山市街地の商業施設地図である。旧城下域の市街地と、富山駅前の繁華街の間には、神通川の旧河道である大きな空き地が大正期においても残っていた。

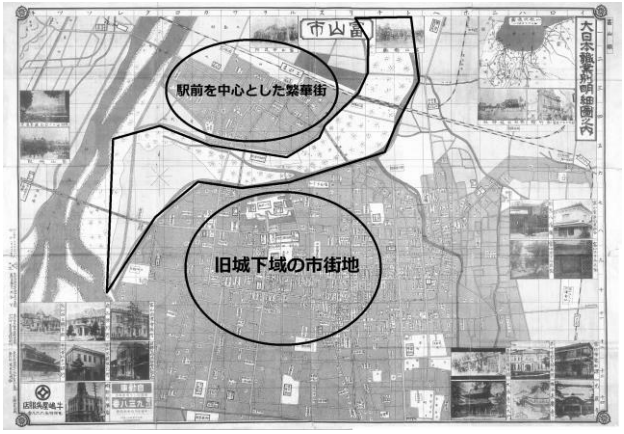

図 5　大日本職業別明細図之内（文献 20 より作成）

馳越工事の影響で、大量の土砂が東岩瀬港付近に堆積し、大型船が近寄れなくなり、荷揚げに支障が出るようになった。そのため、昭和初期に廃川地の処分と東岩瀬港の整備を目的とした第三次神通川改修工事が行われ、富岩運河が開削された [21]。富岩運河を開削した土砂で、廃川地を埋め立てるという一石二鳥の工事を行った（図 6）。その結果、富山市街地は一体として発展が可能となり、富岩運河沿いには工場が誘致され、富山駅以北は工業地帯として発展することになった [23]。

図 7 は、富岩運河を開削した際に出た土砂で廃川地を埋め立てた写真である。埋め立てられた部分の右岸脇に、松川及びいたち川が流れている。

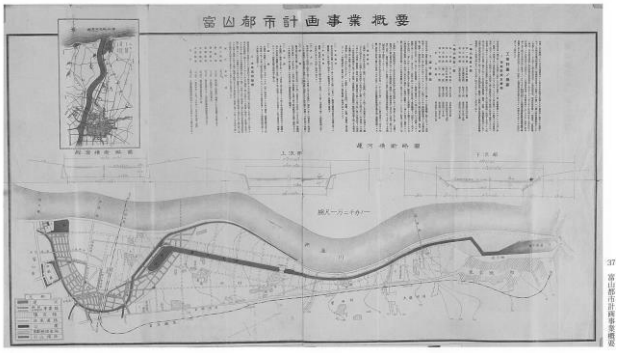

図 6　富山都市計画事業概要（文献 22）

図 7　神通川廃川埋立地（文献 24）

(4)　近代の土地利用

近世において城下町のシンボルであった富山城は、富山県庁となり近代の県都の中心としての機能を果たすこととなった[25]。旧城下域の変容として、千歳御殿跡には、明治初期に市内各地にあった遊郭を集め、桜木町として再整備がなされた[26]。時代の変化とともに遊郭は消え、大正期以降には、官衙学校、銀行、病院、宿泊施設等が立地した。

廃川地跡には、現在の富山県立中部高等学校の前身として神通中学校が建設された。昭和初期には、火事によって仮庁舎となっていた富山県庁舎が移築、さらに行政の誘致によって電気ビルが建設された[27]。富山県庁舎（図 8）、電気ビル（図 9）は当時の姿が写真として残っている。この 2 つの建物は、太平洋戦争の空襲の戦火をくぐり抜け、現在に至るまで残っている。

富岩運河沿いには、①神通川上流部の水力発電による安い電力の供給が可能となったこと、②東岩瀬港、富岩運河、鉄道などの輸送手段が整ったこと、③工場用地が整備されたことによって、一大工業地帯となった[29]。また、中島閘門（図 10）と牛島閘門が設置された。これらは富山の近代化を支えた重要な土木構造物である。中島閘門は、昭和期のものとしては初めての重要文化財に指定されている[31]。

図 8　富山県庁舎（文献 28）

図 9　電気ビル（文献 28）

図 10　中島閘門（文献 30）

(5)　近代の旧神通川の歴史的価値

明治後期以降に行われた神通川改修工事によって、水辺景観は近世から大きく変化した。

第一に、馳越工事による影響が挙げられる。旧河道に水が流れなくなったことと、治水技術の向上によって橋脚を持つ橋が架けられ、船橋が廃止された[32]。旧河道が廃川地になったことで、新神通川と市街地の間に距離が生まれた。このことは物理的な間隔だけでなく、富山の町に住む人々と河川との意識的な関係にも隔たりが生じる契機となった[33]。

第二に、富岩運河開削による影響である。旧河道は埋め立てられたが、小河川として松川といたち川が整備された[34]。そして、富山駅以北は、工場が建ち並び、工場

地帯となった。

第三に、神通地区と呼ばれた廃川地区の土地利用による影響である。富山の近代化のシンボルでもあった新富山県庁舎と電気ビルが松川に対して背を向けて建設された。このことは、河川との関係の希薄化を促進させることとなった。

以上より、蛇行していた神通川に直線路が設けられたことは、神通川において大きな変革期であったといえる。廃川地区が近代富山の中心地となり、賑わい空間が川南の旧城下域から北へ移っていく契機となったことが歴史的価値といえる。

(6)　戦後の土地利用

昭和 20（1945）年 8 月に米軍の空襲を受け、市街地のほとんどが灰燼に帰した。それから復興を遂げ、現在に繋がる都市整備がなされた [35]。旧神通川は、昭和 30 年代まで、神通川本流より取水し、鮎や鰻などが生息する清流であった。また、子どもたちの遊び場として親しまれていた。しかし、高度経済成長に伴い生活様式が一変したことで、生活排水が松川に流入し汚濁が進んだ。その結果、松川は「魚も住まない川」と呼ばれるようになったが、新たな導水施設の導入（昭和 57 年）や清掃活動を根気強く行い、改善されることとなった [36]。

富岩運河もまた、高度経済成長の影響を大きく受けた。輸送手段が舟運から陸運であるトラック輸送に移行したことで不要となり、悪臭や汚濁が問題となった。そのため、運河を埋め立て、道路にすることが計画された。しかし、昭和 59（1984）年に、運河を遺して活用する方針へと転換した。同時期に富山駅北を再開発するために、①富山 21 世紀水公園プラン、②カナルパーク構想、③とやま都市ＭＩＲＡＩ計画、④ポートルネッサンス 21 計画といった整備計画がまとめられ、富岩運河は、都市公園として整備されることになった [37]。

(7)　現在の水辺景観

現在の松川沿いは、富山市街地の中心部を流れる貴重な水辺空間を生み出している [38]。桜並木が整備され、日本さくら名所 100 選にも選ばれるような景観が創り出されたほか、遊歩道が整備され、彫刻が設置されている。また、富山城址公園をはじめとする複数の公園が松川べりに立地し、遊覧船に乗り、桜並木を楽しむこともできる（図 11）。

富岩運河は、富岩運河環水公園が都市内のオアシス的存在として親水空間を創出している。また、平成 20（2008）年にストアデザイン賞で最優秀賞を受賞したスターバックスコーヒーや、平成 29（2017）年に開館した富山県美術館は、現代における新たなビューポイントとして期待されている。富山県美術館 [39]は、近くに高層ビルがないことから、館内のみならず屋上からも環水公園や立山連峰の眺望を四季折々に楽しむことができる。図 12 は、夏の美術館の屋上からの眺望を撮影したものである。近景に近代に造られた後に再整備された富岩運河、中景に現在の富山市街地、遠景には立山連峰が存在している。水辺景観と山岳景観の両方を併せ持った神通川流域の近世の景観を近代の富岩運河の景観から感じ取ることができる。

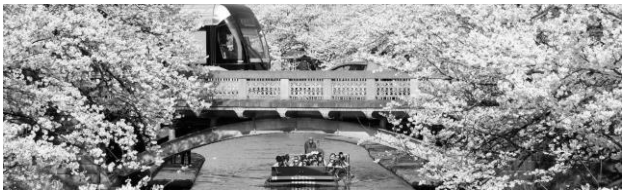

図 11　松川遊覧船（文献 38）

図 12　富山県美術館屋上からの眺望（筆者撮影）

4.　まとめ

本研究では、神通川の旧河道である松川の歴史的価値を明らかにし、富山の水辺空間を生かした街づくりの中で、どのように生かされているのかを検証することを目的とした。

近世において神通川は、北陸街道のルートとしての利用や、漁業の場であるなど生活を支える身近な存在であった。しかし同時に、甚大な被害をもたらす洪水を引き起こすために恐怖の対象でもあった。

近代に入ると、廃川地区と富岩運河は富山県の産業の発展に大きく寄与したが、河川の存在は物理的にも精神的にも市民から離れることになった。

戦後では、産業の発展に貢献したという近代の価値も失い、汚濁の一途を辿った。しかし、現代の松川や富岩運河は貴重な水辺空間として、新たな親水空間の創出に貢献している。

以上のことを踏まえると、近代に造られた富岩運河の価値は見直されているが、近世の水辺景観の中で重要な地点であった松川に対しては歴史的価値を意識した整備がなされているとは言い難い。市街地の中に埋もれてしまっており、桜の季節以外は見向きもされていない状態

である。神通川を背に築かれた富山城下町を起源とする富山の街づくりにおいて、旧神通川の近代だけではなく、近世を含めた歴史的価値を広く知ってもらう機会が必要である。

＜参考文献＞

1) 富山県、「水辺のまち夢プラン」、2008
2) 国土交通省、「日本の川―北陸の川―神通川」(http://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0411_jintsu/0411_jintsu_00.html (2018.3.23 現在))
3) 富山県、「富山県の河川データ」、2016 年 (http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1503/kj00000327-002-01.html (2018.3.23 現在))
4) 富山市教育委員会、『地震・大水・火事―富山』、株式会社ニッポー、pp.19-21、1999
5) 安達實、『富山平野の急流河川における治水技術史』、平成 10 年度金沢大学博士論文、1998
6) 富山県、「～「越中を水害から守りたい」～富山県誕生の歴史」 (http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1503/kj00000327-001-01.html(2018.3.23 現在))
7) 富山県、『富山県史　近代　統計図表』、北日本印刷株式会社、pp.60-65、1983
8) 富山市郷土博物館、『富山城ものがたり』、とうざわ印刷会社、pp.23-34、2005
9) 金沢市立玉川図書館、「越中国富山古城之図（複製）」
10) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会、『角川日本地名大辞典　16　富山県』、凸版印刷株式会社、p.300、1979
11) 古川知明、『富山城の縄張と城下町の構造』、桂書房、2014
12) 貴堂巌、坂森幹浩、「神通川船橋の工学的考察」、土木史研究講演集 Vol.32、pp.307~318、2012
13) 富山市郷土博物館、『再現　千歳御殿』、株式会社なかたに印刷、p.p.1-2、2007
14) 富山県立図書館：古絵図・貴重書ギャラリー、「越中富山神通川船橋之図」、明治初年
15) 富山市教育委員会、『描かれた近世富山展』、日興印刷株式会社、p.24、1995
16) 埴生雅章、「高度差 4000m の富山の自然環境と水辺空間」、日本都市計画学会、［特集］金沢・富山―その歴史と今後の展望、pp.62-65、2013
17) 文献 13）、p.17
18) 富山市史編さん委員会、『富山市史　下巻』富山市、pp.272-273、1987
19) 文献 18）、pp.273-275
20) 富山市郷土博物館蔵、「大日本職業別明細図之内（複製）」
21) 文献 18）、pp.275-277
22) 富山市郷土博物館、『都市“富山”の四〇〇年』、とうざわ印刷株式会社、p.46、2015
23) 富山市郷土博物館、『富山市の都市計画―神通川と富岩運河―』、とうざわ印刷株式会社、p.6、2016
24) 文献 22）、p.11
25) 文献 21）、p.39
26) 文献 10）、pp.375-376
27) 文献 22）、p.5
28) 文献 22）、p,24,25
29) 文献 22）、p.6
30) 環水公園 HP、(http://www.kansui-park.jp/(2018.3.23 現在))
31) 富山県、『とやまの土木 2017』、p.33、2017
32) 高瀬保、「富山船橋考」、田中善男、『歴史の中の都市と村落社会』、pp.79-114、株式会社思文閣出版、1994
33) 水田恒樹、『河川の活動と都市の形成が相互に与えた影響に関する史的研究』、平成 27 年度法政大学博士論文、p.144、2014
34) 文献 22）、p.21
35) 文献 16）、p,62
36) 国土交通省、北陸地方整備局富山河川国道事務所、「松川浄化 PR」、2006
37) 都市環境デザイン会議、『日本の都市環境デザイン 2―北陸・中部・関西編』、廣済堂、p.37、2002
38) 松川遊覧船 HP、(http://matsukawa-cruise.jp/(2018.3.23 現在))
39) 富山県美術館 HP、(http://tad-toyama.jp/ (2018.3.23 現在))

(2018. 4. 9. 受付)

CHANGES IN LAND USE AND WATERSIDE SCENERY OF JINZU-RIVER BASIN IN TOYAMA CITY

Masahiro YOSHIKAWA and Keiko BABASAKI

In order to verify the waterfront design based on the historical value of Toyama castle town, the history of flood control and land use transformation of Jinzu-River are researched. During the Edo Period, floods of Jinzu-river often caused serious damage to Toyama town, on the other hand, the landscape of the river with Funabashi, a pontoon bridge, behind Toyama castle was famous for beautiful scenery. After the Meiji Period, the river improvement for flood control and an excavation of Fugan Canal contribute to the industrialization, and people lost interest in the River. After the war, the river was heavily contaminated. At the present time, riverside landscapes are improved.